

津波常襲地域の漁村集落における公共建築物の位置変遷
—唐丹町小白浜集落を事例として—

21018048 安田小百合
指導者 葉袋奈美子 准教授

漁村集落 津波 高地移転
復興計画 三陸海岸 建物位置

1. 序論

三陸沿岸部はその地形により大規模津波被害が多く、昭和三陸津波後に高所移転などの復興計画が行われて来たが、沿岸部に住宅が再建され再び被害に合う地域も多い。村尾¹⁾らはその原因として①法的拘束力の低さ②土地所有権③防潮堤による安全意識④居住環境の不十分などを挙げたが、地区の復旧速度に関わると考えられる公共建築物に着目した研究は少ない。本研究では明治及び昭和三陸津波地震において大規模な被害を受け高所移転を行った唐丹町小白浜集落を対象に、その公共建築物の位置変遷を明らかにし、今後の津波防災地区整備施策上の示唆を得ることを目的とする。

2. 調査方法

調査地にて入手した図版・文献、及び国土地理院発行の旧版地図とゼンリン住宅地図より建物位置の変遷を把握し、高度計を用い実測を行った。また平成 25 年 9 月から 11 月の期間に、東北地方太平洋沖地震津波以前に住宅が高台又は海岸部に位置していた集落住民の 10 名に対して昭和三陸地震津波後の集落の土地利用状況や生活の様子のヒアリングを行った。

3. 調査地概要

唐丹町は岩手県釜石市の南部に位置し、小白浜と両隣の片岸、本郷、他四の計七つの集落で構成され、小白浜地区は山が急に迫り海岸に並行して標高差各 15m 程の三本の道路が通じ段々状に家が建ち並ぶ。平成 22 年度の人口は 548 人 225 世帯、漁師率は 53.3%である。

唐丹町における津波被害状況と被災後の施策は表 1 の通り²⁾である。昭和 9 年に高所に敷地を造成したが、その後低地部に住宅が増え、東北地方太平洋沖地震津波では抜本的対策とした高さ 12.5m の防潮堤が破壊され造成敷地以下に位置していた住宅の殆どが流出した。

表 1 唐丹町津波被害状況

年	災害	波高	流出棟数	死亡人数	施策内容(小白浜地区)
1896	明治三陸地震津波	16.7m	341人 71.9%	2100人 74.8%	集落の海岸より200m後退 → 海岸の警備設備により復旧地帯
1933	昭和三陸地震津波	12.1m	283戸 47.9%	339人 10.6%	97戸高台移転
1960	千代地震津波	3.4m	-	0人	釜石津波被災後建設(昭和34年着手) → 東北地方太平洋沖地震津波被災による被害
2011	東北地方太平洋沖地震津波	17.5m	254戸 28.5%	19人 0.9%	橋弁 (他地区と比較して津波被害に耐え得る高台あり)

4. 土地利用の変遷

4-1 集落の変遷

小白浜集落では山手に縄文期の集落跡が発掘され、古代には和人が海岸部に移住してアイヌ人と雑居し、海産と林産に恵まれ藩政時代には海陸の宿駅となり、第一次世界大戦の勃発頃まで気仙北部の交易の中心をなした。唐丹村の中心地は初め片岸、次いで永く本郷であったが、明治 22 年の市町村制実施後村内の公共施設の殆どが小白浜に設置され、以降現在まで小白浜集落が唐丹地区の中心地である。三年毎に開催される唐丹町の祭典大名行列は片岸の天照御祖神社を発し、旧国道を通過して小白浜、本郷へと至る。(図 1、表 2)

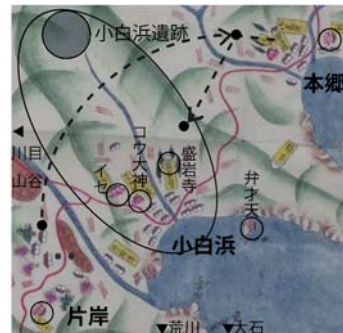


図 1 中心集落移動状況

表 2 近代以前の集落の様子

時代	集落の様子	中心地
縄文	山手に比較的大規模の集落跡	—
古代	和人が移住し、アイヌ人と雑居	[片岸]
中世	小城(伝城)跡あり	[本郷]
藩政	伊達藩領、海陸交通の宿駅	本郷
明治	船宿として酒屋・旅館が立ち並び賑わう	小白浜

4-2 道路の変遷

小白浜集落は明治以降大きく三地区に分けて呼称され、二本梨沢を基点に南の中央通りを「伝城」、東の方一帯を「上ノ台」、海岸地区を「小白浜」といい、昭和 28 年に村議会により「小白浜」と統合呼称されるようになった。集落内道路の造成順序を図 2 に示す。主要道路は初め片岸から伝城、二本梨に合流する①だったが、昭和 17 年頃に公衆用道路となった③に商店等が立ち並び集落住民から「シキチ通り」と呼ばれ主要道路となって現在に至る。

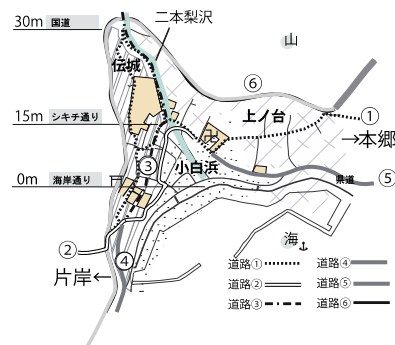


図 2 主要道路変遷図

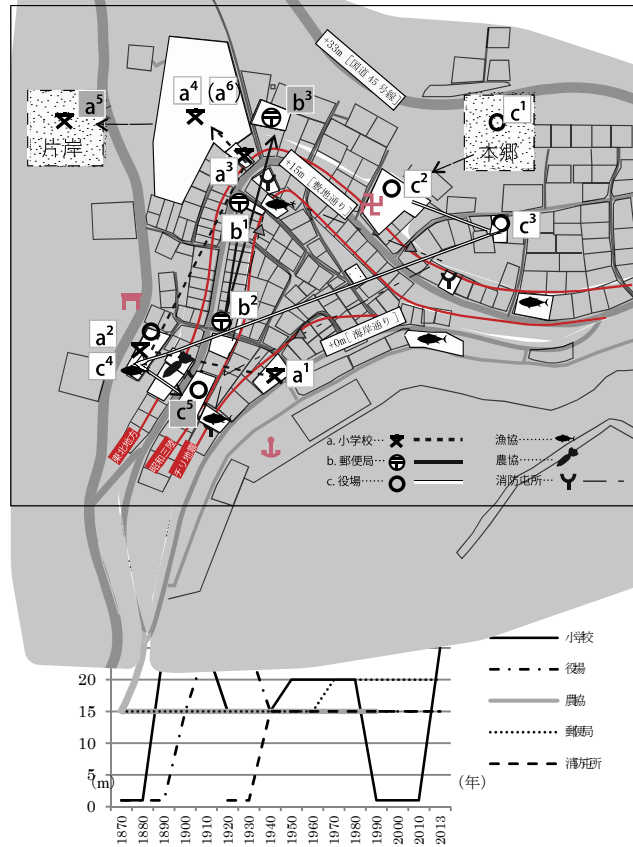
4-3 公共建築物の変遷

公共的建築物として小学校、役場、郵便局、漁協、農協、消防屯所の位置変遷を調査した。(図3) 小学校、役場(本郷)、消防屯所は初め海岸部に位置し、1896年に発生した明治三陸地震津波により流出した後、村議会後にいずれも標高約15m以上の位置に移転を行い(表3)昭和三陸地震津波では被害を免れたが、小学校は集落内に土地が不足し昭和56年に片岸集落の低地部に移転し平成23年の東北地方太平洋沖地震津波により被災し全壊した。

図4は昭和三陸地震津波以降の集落の土地利用状況である。小白浜集落では昭和三陸地震津波後に自主復興により標高約15m地点に敷地の造成と高所の土地所有者の協力で宅地開発を行い、全体としては低地部において住宅増加が見られるものの津波被害を危惧して高所移転を行った住民もいる。また、海岸部の埋め立てと漁業施設の増加の時期に海岸部において商店数の増加が見られる。

5. 結論

唐丹町小白浜集落では、明治及び昭和津波災害を経て村民の合意と協力により公共建築物及び宅地の高所移転が行われ、特に公共建築物は移転後に殆どが被災を免れている。敷地造成や公共建築物の移転は集落内の主要道路や商店位置、周辺集落との位置づけにも影響を及ぼす為、今後の復興整備の際には物理上の防災整備だけでなく生活視点も合わせた計画が必要であると考えられる。



【参考文献】
1. 村尾修 他『岩手県沿岸部津波常襲地域における住宅立地の変遷』日本建築学会計画系論文集 201
2. 波高引用：東北大災害制御研究センター津波工学研究室「津波痕跡データベース」
3. 釜石市役所『釜石市史唐丹小史資料編』1974年
4. 釜石市図書館所蔵『建物の変遷』1995年

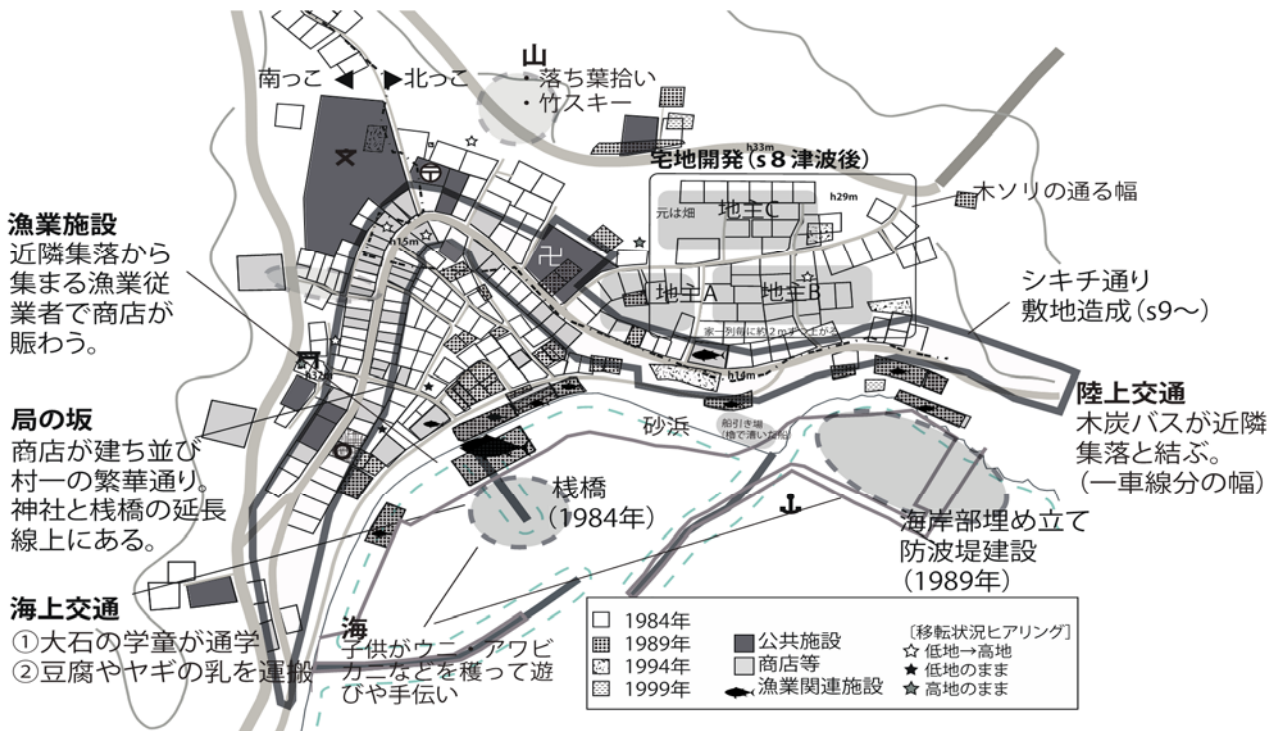


図4 昭和三陸津波以降の集落の土地利用状況

¹ 村尾